

書評

『トクヴィル—平等と不平等の理論家』(宇野重規著)

鏑木政彦

本書は、トクヴィルの思想を「民主ラシー」*を鍵概念とする近代社会のグランド・セオリーと解釈し、『アメリカの民主ラシー』をアメリカ社会論から「民主ラシー」論へと読み替えて、それをもとに「民主ラシー」の未来像を描こうとする試みである。読者は、本書の「民主ラシー」解釈によって想像力を刺激され、民主ラシーと結びつけられたアメリカという思考の制約に気付き、「民主ラシー」の将来へと思いをはせることだろう。すぐれた書物というものは、読者の思考の縛りを解いて、想像力を解き放ち、新しい世界を意志するように励ますものであるが、宇野重規氏は本作においてもまたそのような一冊を世に送ったと思う。(著者は人々の思考や感性のあり方を含む社会類型としての「民主ラシー」と政治体制としての民主ラシーを区別する。)

本書が単なるトクヴィル解釈に留まらず、独自の政治理論の書物たり得ているのは、「民主ラシー」における人間の分析と描写に成功しているからである。第1章で筆者はまず、『アメリカの民主ラシー』執筆の背景となる新時代における人々の想像力の変化にふれる。著者は、『赤と黒』のジュリアン・ソレルという(トクヴィルの同時代に設定された)人物像を巧みに用いて、人々が「いまや、違う自分になる夢をみることが出来る」(23頁)ようになった時代を生き生きと描く。この想像力の解放は、トクヴィルが歴史の基本的趨勢と理解した「諸条件の平等」によってもたらされたものである。第2章でそれは「諸身分を隔ててきた壁を破壊してしまう想像力の変質」と表現され、そこから「人が社会を理解する象徴秩序の変容」(59頁)が生じるとされる。著者は、この新しい想

像力をもった人間を<民主的人間>と名づけ、その想像力の変質によって変容する社会の象徴秩序を次のように分析する。

<民主的人間>は、他者を自分の同類と想像し、他者と自己を「人類」に所属するものとみなして、特定の集団への帰属を偶然的なものとする。このため<民主的人間>の個性はかえって抽象的なものとなり、人々は平等を前提としながら差異の承認を求めるようになる。著者は、これを不平等な「アリストクラシー」と対比して、平等な「民主ラシー」の社会ではかえって不平等が鋭敏に意識されるため、そこに平等化のダイナミズムが生み出されるという。身分的秩序から解放された想像力が象徴秩序を変容させ、現実の支配関係に対して絶えず平等の視点から異議申し立てをする道が開かれる。ここには、著者の第一作『民主ラシーを生きる』(1999年)で描き出された「政治」が、<民主的人間>の想像力という観点から描き直されている。本書でも著者は、ここに「民主ラシー」の可能性の中心があると認める。

著者は明確に関係づけているわけではないが、本書でしばしばふれられる懐疑と不安は、想像力というモチーフのヴァリエーションであるように思われる。著者によれば、トクヴィルは平等化を「摂理」とは認めても、新時代の想像力に同調できたわけではない。それだけでなく彼は、啓蒙の新知识によって信仰に対する懐疑と将来に対する不安へと導かれ「神を見失った時代に、人間はいかに自らを越えた存在を見いだすことができるか」(31頁)というパスカルの問いを抱えこんだ。この懐疑と不安は、想像力のある種の形態と言えないだろうか。神と人の間に平安な関係を想像することができるとき、

人は不安に陥ることはないだろう。人と人の関係を堅固なものとして想像できるときも、同様である。それらが確実なものとして想像できないとき、人は懐疑と不安に襲われる。著者は、トクヴィルの精神にこのような想像力に由来する人間存在の空虚さの自覚を読みとっている。しかし、トクヴィルはキルケゴール（トクヴィルの8歳年下）のような思想家とは異なって、ギゾーの文明史から学んだ「多様な諸要素の複合的連関として社会を捉え、社会の現状を歴史的なダイナミズムの結果として考える視座」（36頁）から、自己の生まれ育った環境と時代との矛盾をのり越えようとした。想像力の不全を、実存的決断などではなく、人と人との関係性を築き直すことによって克服すること。筆者には、著者の描き出すトクヴィルの課題がこのようなものであったと思われる。

ところで、〈民主的人間〉が人と人との関係を築く上での最大の問題は、彼が自由を手放して平等の隷従に陥るおそれのあることである。先にふれたように、「デモクラシー」における人々の想像力の変化は象徴秩序の変容を招くが、この新しい秩序の中で〈民主的人間〉は、自己の外部に絶対的な根拠を見いだせず、不安と困惑を抱え込む。自分の内なる世界においては至上の存在、外との関係においては無力な存在。この無力感を補うために〈民主的人間〉はしばしば多数者という絶対的権力に膝を屈する。「デモクラシー」のもとの想像力の不全が、人々を権力依存へと誘い、自由を破壊するのである。

トクヴィルは「境遇の平等の漸次的進展」を神の「摂理」とみたが、「デモクラシー」が「民主的専制」に陥って、自由の破壊に至ることをも「摂理」としたわけではない。平等が実現するには、人々が平等に自由になるか、あるいは平等に隷属するかのいずれかである。トクヴィルは、イギリス系アメリカ人が前者を選んで「人民主権」の原理を実現したことを高く評価した。しかし、〈民主的人間〉の人間学からみれば、「摂理」としての平等と自由との両立はつねに可能というわけではなかった。

自由と平等の結びつきを確保するためには、

『アメリカのデモクラシー』の分析に則して、アメリカのような分権的社会と宗教的精神が不可欠であると考えられてきた。もちろん、それらアメリカ的特性は自由なデモクラシーのために重要な契機であることは間違いなく、著者も第3章においてトクヴィルの見たアメリカを分析している。しかし著者は、『アメリカのデモクラシー』がフランス人貴族に向けて書かれた点を重視し、それがアメリカ社会という特殊な条件を越えてデモクラシーの可能性を探った書物であることを強調するのである。こうして『アメリカのデモクラシー』は、特殊アメリカ的文脈から離されて、「デモクラシー」の機能する普遍的条件を探究する書物に位置づけ直され、自由と平等を両立させるアメリカ独自の社会的基盤をもとにして、「デモクラシー」の一般的基盤の探究が目指されるのである。

〈民主的人間〉の想像力がもたらす絶対的権力への依存心が「デモクラシー」の脆弱性であるとすれば、その弱さを補完するための方策を、トクヴィルは二つの方向から考えた。著者は整理する。一つは「デモクラシー」とは異質な原理を「デモクラシー」社会の中に組み込んでいく道であり、もう一つは「デモクラシー」自身の潜在力を全面的に開花させる道である。第4章において著者は、異質性を培養する結社や、「いま・ここ」を越える想像力として機能する宗教を前者の例として、利益考量や判断などを後者の例として分析する。その試みは、デモクラシーの形成のために有益な示唆を提供しているが、ここではむしろ、著者の意図をやや踏み越える危険を自覚しつつ、それらの示唆をもとに、自由なデモクラシーの実現のための「人間学」（61頁）的条件を考えてみたい。著者の視点からとりわけ問題となるのは、想像力、信仰、思考の三つである。

〈民主的人間〉の脆弱性は、想像力を制約する型が不在であるために、自意識に固執して他者を見失い、不安や恐れから後見的な権力を呼び込むところにある。そこで、トクヴィルは「知性の健全な枠」として宗教を擁護し、「共同の観念」の必要性を語るのであろう。これは保

守主義に好まれるトクヴィルである。しかし、現代の政治理論のためにトクヴィルの可能性を考える著者は、このような想像力を制御するための信仰よりも、それを合理的に制御するための思考の方により大きな可能性を認めようとする。だからこそ「結び」において著者は、「インターネット」の問題にふれるのだろう。なぜなら、インターネットは「知の再編」に関わり、デモクラシーを支える思考に大きな影響を及ぼすことが予想できるからである。

そもそもトクヴィルによれば、民主社会では「個別の事実のすばやい把握と大衆の移ろいやすい情念についての日々の観察、時の偶然と好機を逃さぬ巧みさ、これらがすべての問題を決定する」(松本礼二訳『アメリカのデモクラシー』第二巻、上、81頁)。このような特質は学問にも影響を与える。その弊害を食い止めるためにトクヴィルは「今日必要なのは人間精神を理論にひきとめることである。それはひとりでに実

用に走るのだから、学問の副次的な効果の詳細な検討に絶えず引き戻すどころか、時には精神をそこから引き離し、根本原因の考察にまで高めるのが望ましい」(同上、87頁)と述べていた。

そして著者は、第二作『政治哲学へ』(2004年)の末尾に次のように記していた。「より多様でより実効的なデモクラシーの未来は、各社会における政治哲学の営みとその対話にかかっている」と。本書における著者の試みは、政治哲学という思考の実践である。想像力の病である不安を抱えた<民主的人間>が、自己と他者との間に信頼できる秩序を創り上げていくために、著者はトクヴィルよりもいっそう思考へと舵を切っている。不信仰の時代において自由なデモクラシーを形成するために、著者は、「想像力の健全な粹」を思考に期待するのである。ここにはデモクラシーに向けて勇気と知性が一つとなって現れている。